

# 杉本和寛先生(音楽学部・言語芸術)が 学生にすすめたい本

この10年程、江戸・東京に関する本が溢れんばかりに出版されており、さてどれから手をつけようかと悩むことがしばしばであるが、ここではオーソドックスなもの、少々偏ったものを挙げておく。

オーソドックスな方は、『江戸・東京を造った人々 1・2』(ちくま学芸文庫)で、既に1993年には単行本として出版されており、昨年文庫本化された。元々『東京人』という雑誌の連載物で、政治・経済・土木・文化・風俗等、さまざまな面から江戸・東京の形成に関わった歴史上の人物を、書き手の方もバラエティに富んだ面々が描いており、こうした多面性こそが、江戸から東京へとつながる、世界でも稀有な大都市の真骨頂であることを思い知らせてくれる。第1編が主として都市プランニングに関わった人物を、第2編が文化的な側面から関わった人物をとりあげているが、それぞれ編年体で構成されており、この400年の変遷を一気に読み通すことができる。

偏った方は、朝倉無声『見世物研究』(ちくま学芸文庫)。見世物は、江戸時代には芝居と並んで庶民を驚喜させた一大文化であり、文学・芸能・宗教・美術等さまざまな分野と影響関係にあるが、際物的な性格故が演劇に比べてその研究が大きく遅れてきた。『見世物研究』は嚆矢にして長年にわたり唯一の研究書であったが、古書での入手しかなわず、修士の院生の頃は不便を感じたものであった。近時見世物への関心が高まる中、文庫本化された『見世物研究』、川添裕の快著『江戸の見世物』(岩波新書)、さらにはその延長線上にある木下直之『美術という見世物』(ちくま学芸文庫)を並べると、江戸から明治への一つの道筋を見通すことができる。

付け足しでもう一つ。切絵図をはじめ、江戸の古地図の複製も氾濫状態であるが、人文社の『江戸東京めぐり 江戸電車路線図』は、文政11年版江戸図に現代の地下鉄路線図を重ねており、江戸時代の地名が今のどの辺りになるのか実に見当をつけやすい。下町散歩や池波正太郎の小説のお供にお勧めである。